

5 4 《聖マタイの召命》論争の最終結論

第3の説【メガネの男説】

2023・2024

真鍋友範

2013年の段階で、私はカラヴァッジョの描いた聖マタイはメガネの老人であると、最終判断している。

しかし、従来からの誤った2説はそのまま堂々とウィキペディアに掲載されている。ただし、言論の自由があることだけは認めよう。

しかし、カラヴァッジョの名誉回復の為にも、絶対に誤った解釈は放置できない。ここに第3の究極の解釈を紹介したい。

ウィキペディア（2023年現在）において、《聖マタイの召命》の正しいとされる解釈なのか疑わしいが、そのまま引用し、拝見しよう。

本作は『マタイによる福音書』9章9節にある、イエスが収税所で働いていたマタイに声をかけ、マタイがイエスの呼びかけに応じて付いて行ったというマタイの召命の記事をもとに描かれている^[2]。

長らく中央の自らを指差す髭の男がマタイであると思われていた。しかし、画面左端で俯く若者がマタイではないか、という意見が 1980年代から出始め、主にドイツで論争になった。未だにイタリアでは真ん中の髭の男がマタイであるとする認識が一般的である。

だが、髭の男は人差し指を水平にして画面左を指差しており、カラヴァッジョ作品では人差し指は第三者を指す場合に用いる事、髭の男は金を支払う手つきをしており、若者は右手でその金を数え左手で財布を握りしめている事、更に言えばイエスの人差し指は先が下がっており、その延長線には若者がいる事から、この左端の若者こそが聖マタイであると考えられる。他の人物が普段の表情をしている中で、若者だけが悲嘆に沈んでいる。画面中では、マタイはキリストに気づいていないように見えるが、次の瞬間使命に目覚め立ち上がり、あっけに取られた仲間を背に颯爽と立ち去る、そのクライマックス直前の緊迫した様子を捉えているのである。

さて、まとめると、以下だ。

- 1 イタリアでは、中央の髭の男がマタイであると一般認識されている。
- 2 ウィキペディアの執筆主幹は、左端の若者がマタイであると認識されている。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

これらの2説は、完全な誤りである。順次解説しよう。

1 中央のヒゲの男はマタイではないとする理由

カトリックの教義を信者に伝えるのが、聖堂絵画の目的であるならば、もう少し納得できる解説を鑑賞者に伝えないと、鑑賞者は納得できないだろう。

まず、絵画での物語の流れが、逆である。イエスが不明確な呼び出し動作を行ったから、マタイであるヒゲの男が質問した場面という解釈だが、誤りだ。

なぜなら、ストーリーが完結しないのだ。呼び出しが完了しない。

質問したマタイは、疑問の海に放り出されたまま、放り出された場面という解説だ。絵画をカメラでのスナップ・ショットのように誤認識している。

実際には、以前ローマで団体旅行者の一団に解説するローマ市公認の公式ガイドの方は、マタイは中央のヒゲの男であると説明されていた。

つまり、カトリック教会の正式見解なのであろう。17世紀の美術史家ベッロリ由来の解説を曲げないというのは、イタリア人学者の頑固さなのか、それとも不勉強であるのかは不明だ。それとも、師匠にあたる学者の意見には逆らえないという、狭い学問世界にありがちな悪習の故だろうか。

では、逆にこの主張を信じる方に質問したい。

- 1) 【なぜ、質問する男の親指は、立っているように描かれているのか】。子供の頃の習慣が残っていると主張するなら、笑われます。
- 2) 【なぜ、イエスは指差すのなら、指の第2関節部や手首が曲がっているのか。】
- 3) 【なぜ、イエスは左手の平を開く必要があったのか。】
- 4) 【なぜ、イエスは右足を一步左に踏み出しているのか。】
- 5) 【一連の複雑なポーズ4) 3) 2) を、イエスはなぜ採用する必要があったのか。単純に指をまっすぐ伸ばして指差せばよいだけなのに。なぜ。】
- 6) 【なぜ、先に髭の男が質問し、イエスが答えるというストーリーの流れは否定されているのか。根拠があるのか。単なる思い込みでは無いか。】
- 7) 【カラヴァッジョは、描かなくても良いような、取るに足らない余計なポーズを、各所で精密に描いたのだろうか。そもそも余計な表現なのか。】
- 8) 【眼鏡の男の額の点光は、何の光なのか。宗教上無視して良いものか。】

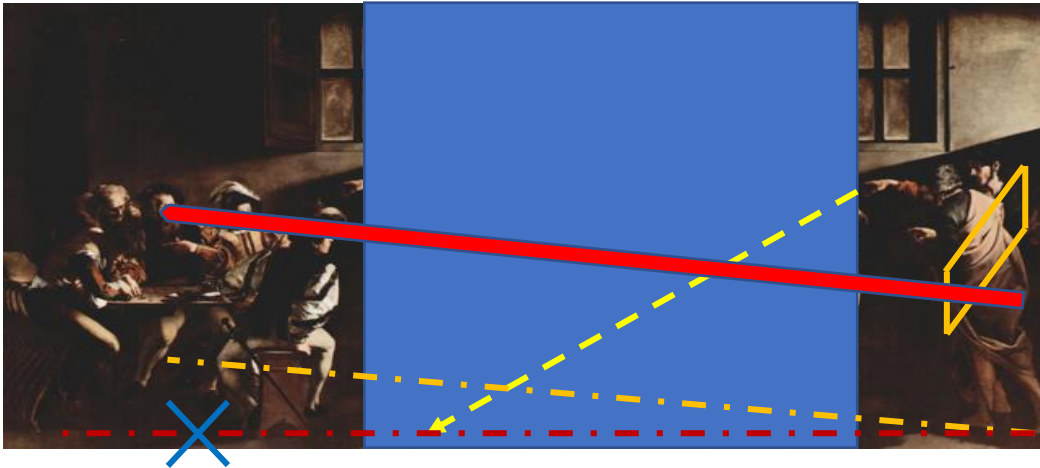
恐らく、細かい登場人物の身体動作を見ていない面々なので、これらの質問にはびっくりするだろう。

2 左端の若者とする主張が誤っている理由

さて、1) から8) に加えて以下の質問を追加する。

9) (イエスの人差し指は下がっており、その延長線には若者がいる)、と解説してあるが、【世界中で指先を下に曲げて指差す動作は存在しない。】人が指差すときは、指を真っ直ぐに伸ばす。常識だ。【折り曲げた指差し動作】は無いのだ。
しかも、カラヴァッジョ絵画での重要な特徴を見逃している。実はカラヴァッジョは左右空間を縮めて描いている。【左右空間圧縮描法】テーブルとイエスの一行の間の距離は、遠いのに近くに圧縮されて描いていることに気づいていない。

描かれた左右二つのグループは、実際にはもっと離れている事が、【登場人物の視線】で表現されている。これを見落としている。



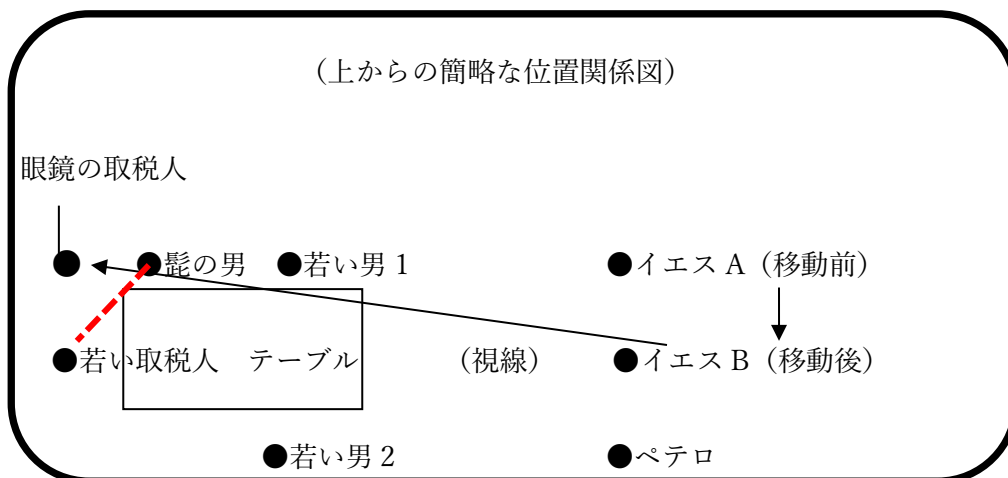
- * 左右空間圧縮描法の空間構成。実際は横長の空間だ。
- * 視線の解釈では、両者間距離は若干近くなる。

つまり、イエスが下方を指差しているなら、そこには若者はいないことになる。

10) たしかに、髭の男の水平に縁で伸ばされた指は、髭の男自身を指差すものではない。しかし、うつむいた若者なら、カラヴァッジョは、髭の男の左手の人差し指を短く描く必要がある。しかし通常の長さの指だ。これは、指差しているのは、隣の眼鏡の収税人であり、若い収税人ではない。

【若い収税人を指差した表現なら、45度の角度から見た指は、短く描かれる必要がある】。この説明は、透視図法上あり得ない矛盾だ。

この鳥瞰図を見れば、理解できるだろう。



画面正面側

- 1 1) 弟子ペテロの両足の軸線（オレンジの波線）は、うつむいた左端の若い収税人に向かっている。ペテロの背中面への直交線（レッドの線）も、方向はメガネの男やヒゲの男の方面だ。つまり、カラヴァッジョは、ペテロは若者を無視した状況として描いている。なぜか。カラヴァッジョの考える画面構成の構想に、若者をマタイにする予定はなかったということだろう。
- 1 2) 画面の登場人物の細かい動作が無視されることにより、カラヴァッジョが描いた画面上の全体ストーリーが再現されていない。モデルを採用して描くカラヴァッジョ流の写実絵画に対する本質理解が不足している為ではないか。
これは、カラヴァッジョに対する侮辱にならないか。

~~~~~

つまり、イタリアの《ヒゲの男説》も、ドイツ学派に追従した日本の主流学者の《若い収税人説》も双方共に誤っているのだ。

~~~~~

では、【呼ばれたのは誰かを特定する究極の解説】（第3説）を紹介する。
第3説とは、【マタイは眼鏡姿の、一見立っているかのように見える収税人だ、】とする説だ。

重要な点は、先入観なしに、絵画上の登場人物の身体動作を正確に読み取り、画面上のストーリーを読み取るという努力だ。

17世紀の美術史家ベッローリが、どう解説したかについては、無視して良い時期だ。間違った解説を400年間盲信したままで良いのか。それでも学問なのか。イタリアの美術史学者は反省したほうが良いだろう。

学問である以上、過去の美術史家の言うことだけを信用して絵画を見てはいけない筈。実際の絵画内容を読み取ることのできる実技系の美術解説が必要な時代だ。でないと、基本的なデッサン理論さえ知らない、実技が全く理解できていない美術史学者の一方的解説を受ける事態になる。

中には、ウェブ上の聖マタイの召命に関する解説文（2023）があったが、これは更にひどいものだ。イタリア説と、ドイツ学派説を並べるだけで、全く説得力がない。

もちろん、読んだ人は、当然何が正解なのか理解不能だ。

これを読んだ東京芸大の実技系学部の学生や院生が理解できたのだとすれば、芸大生のレベルも知れたものだ。

さて、10年前の2013年には既に【マタイの謎は解けた】、という立場だが、再度紹介しよう。

~~~~~

まず、結論：【眼鏡の収税人がマタイ】だ。

そう言うと、すぐに反論されそう。聖書マタイ伝には（イエスは、マタイが椅子に座っている姿を窓越しに見た。）とあるから、立っている姿の人物はマタイでは無い。最初から除外だ、と誤解する。

しかし、それはひどい先入観だ。では聞きますが、『座っている人物は、永遠に座っているのですか。』そんな永い遠に座り続ける人物は、ロダンの《考える人》像以外に無い。

眼鏡の収税人は、若い収税人と髭の男との間の徴税作業を監視するために、最初は座っていたが、椅子から立ち上がり、そして、前のめりになりながら、覗き込んだ姿勢だ。【つまり片手を机において、体幹の体重を支えていて、立っていないのだ。】

これを見抜けない人物は、残念ながら、絵痴だと私は思う。

カラヴァッジョの作品で、とても重要な一方の側の主役が、無視され解説されていないのだ。

【カラヴァッジョが、この人物を描いた理由】を全く考えてもいないのだ。

しかも、先入観は、正確な判断を鈍らせる。

スターは、舞台上で目立つ位置に配置されるべきだし、目立つ位置に存在するべきだ、という先入観だ。

しかしながら、カラヴァッジョはそのような約束事にはとらわれない画家だ。

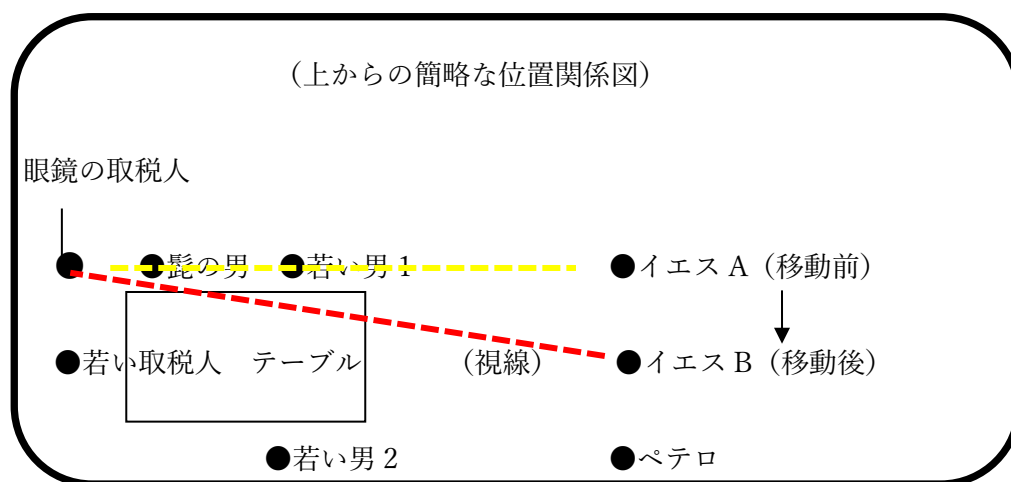
イエスは従者であるペテロの向こう側に描かれ、対照的に、マタイは、若い収税人の向こう側に描かれている。

では、突然収税室のドアを開けてイエス一行が現れたとき、最初に気づいた髭の男は、左手でイエスに何を質問したのか。

絵痴の人は、親指を見逃す。【親指には意味がある】。この画面での質問の意味は、「お探しの人は、私ですか、それとも隣の人ですか。」まず親指を自分の胸らに当て、次に人差し指をまっすぐ隣に向けたのだ。デッサン上、真直ぐ横向きの指を描いている。これが45度斜め前に座る若者を指差すなら、カラヴァッジョは【短い指を短縮法で描く必要がある】のだ。しかしまっすぐ横向きの指なのだから、指差しているのは、疑いなく眼鏡の男だ。

質問を受けたイエスが、どう反応したかが、克明に描かれている。

まず、イエスは左手の平を開いて、質問する髭の男に見せた。【質問を受容するという意味】だ。次に一步右足を左に踏み出す必要があった。なぜなら【元の位置からは、眼鏡の男の顔がよく見えない位置であったから】だ。（下図）



画面正面側

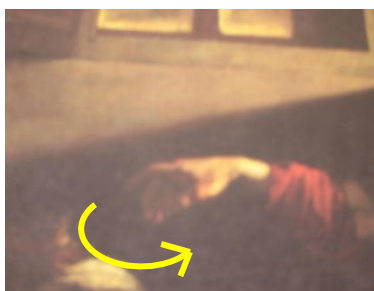
次の動作は、右手を上腕と共にゆっくり回す動作だ。【指差していない。】もう一度言う。イエスは指差していない。力なく指刺したのでは無い。下に向けて指差したのでも無い。イエスは右手の上腕と右手を回したのだ。

理由を言う。呼び出す相手を明確にする為には、質問者に対し、「あなたの向こう側の人だ」と答えるしか無いのだ。だから、右手の上腕と右手を回したのだ。

【イエスが指差すならば、結局不明確のままなのだ。】

カラヴァッジョの表現に戻ると、イエスの右手の手首は曲がり、指の第二関節は曲がっている。これは、力が込められてないときの手の表情なのだ。

だから、【指差しているのでは無い】



【髭の男は2段階の動作で質問し、イエスは3段階の動作で答えたのだ。】

これが読み取れない人は、絵痴の可能性もある。抽象画ではない、具象絵画において、絵が読めない絵痴人口は音痴人口よりも多い。

\* 絵痴（えち）とは音痴の対語。絵画音痴の略語。造語。

驚くことに、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》は、動画世界を描いてあるのだ。

静止画でありながら、当時では先進的な動画の世界観を表現したことが、バロック絵画を開拓したカラヴァッジョの真骨頂なのだ。

言い忘れそうだったが、まだ答えてないのは、眼鏡の男の額の点光だ。ルネサンスの画家は、受胎告知の場面に、父なる神からの啓示の光がマリアに当てられているシーンを描いている。光線だ。しかし実際には、線は見えず、見えるとすれば光の点だ。眼鏡の男の額の点光は、父なる神からの啓示の光が、右側の高窓を通して、太陽の光とともに一筋の点光となって、マタイに注がれていることを示している。カラヴァッジョの伝統的宗教絵画表現への理解の深さを示す一例だ。

同時に、【イエスは、父なる神からの啓示の点光によって、マタイへの召命へと導かれている。】

結論として、2013年には、既に《聖マタイの召命》の謎など存在していな



いのだ。

2024年現在、まだ『2説ある』とか、『誰がマタイか分からない』、と宣う美術史家は、廃業した方が良いのでは無いか。

一方、真実を是正しないイタリアのカトリック教会関連美術史家も、ガリレオの地動説を封印したまま、誤った天動説を400年間放置した事実と同様に、その怠慢は許されるものではない。